チャールズ・マーサー著（永田良昭訳）

『環境心理学序説——都市化と人間生活』

新曜社，東京，1979年1月，306＋vi＋4ページ

本書は「都市工学，動物学，心理学を修め」たイギリス人 Charles Mercer（1934年生）による Living in Cities : Psychology and the Urban Environment, Penguin Books, 1975 の全訳書である．

著者は「今日，心理学者が身を挺してとり組むべき緊急の問題は何であろう．人口問題，過度の人口の集中，環境の質——人口密度の高い都市環境のなかにあらわれているさまざまな社会問題.」と述べている。著者は人口問題を地球の資源の限界の問題と過度の人口集中の2つの問題としてとらえ，後者に環境心理学に拠ってとりくんでいる．著者は文献や実験報告の批判的検討の作業にとりくみ結論的には「高密度＝極度の病理現象」という通俗的な図式をしりぞける．その意味では楽観的であるが，「高密度の生活を直接経験することによってはじめて産児調節を行なわねばならないことに気づくというかたちの自己抑制に依存するわけにもいかない」と自動的な人口増加停止を否定するという意味では悲観的である．このため，環境心理学の課題ではないが,「親になることへの動機……が利用しうる資源の状況に適合するように規制されるものか」といった心理学の課題を提起している．

著者はこのように環境心理学に拠って最後に人口問題にとりくんでいるのだが，その前に環境心理学自体の吟味（1．課題，2．立場，3．方途）と若干の展開がされている。吟味では，伝統的な心理学に対する批判的検討を行ない，環境心理学の理論的な展開の基礎（適応する動物としてのヒト，刺激を求める動物としてのヒトという2つのモデル）を明示している．

展開ではまず,「距離と行動には一見明瞭な関係がみられること……に関係して提出された」「建築環境決定論」（1966年～）を検討し，その主張には疑問を示しながらも，環境心理学の発展にとって大きな意味をもったと評価している。次に，都市化にともなう人類の「心理的一社会的な進化」についての研究の「きざしとなる今日の研究」として，「空間と子どもの発達」をとりあげている．（この意義づけ自体大変興味深い.）結論として，高層高密住宅は世代間の隔離を促進し，社会的な病理現象（非行など）が増大するのは確かだが，高層化が必要なら，子どもの社会化の主たる担い手は家族であるという考え方をかえ，「多数の大人からなるグループ」を用意するというように生活様式の方を変化させる必要があるとしている．（このように都市的環境が家族・社会に与える影響を（それへの適応をふくめ）検討するところに環境心理学の特徴がある。）さらに，環境心理学の基本的概念として「身近かな空間」と「巨視的な空間」の2つを検討し，その上で先の人口問題にとりくんでいる．

以上の展開にあたって著者は特定の学問領域にとらわれない広範な既存研究を引用し，かつ精密な批判的検討を行っている．

本書の内容は以上のようなもので，近年の人口問題研究のひとつの新しい動向（たとえば，アメリカ心理学会の環境心理学および人口部会によって *Journal of Population* が1978年から刊行）の文脈を知らせる意味で紹介するものである．なお，現在（1979年夏）までのところ *Journal of Population* に掲載された数十編の論文のうち人口密度に関するものは半分を越えているが，Mercer（およびこの書）が引用されているのは1回のみで，彼が比較的ユニークな位置にあるものとみられる．（廣嶋清志）